

より良い日本語教育のカリキュラムを目指して

——本短期大学日本語関連科目担当教員に対する
アンケート調査からの事例報告——

A Study of Japanese-Language Curriculum for Foreign Students at NJC

日本語教育研究班 小 嶋 栄 子・縣 恒 則
松 永 宏 之

Abstract: The aim of this study is to establish systems of curriculum of Japanese-language for foreign students at NJC, who had finished beginners' course in Japanese before they came to Japan. We obtained information by means of questionnaires from teachers who teach Japanese-language and culture, and analyzed and investigated the response. The results show that it is important to organize classes by placement test in April and teachers' efforts are very valuable for teaching Japanese as a foreign language. So we believe that they will bring some concrete improvements for foreign students. We also recognize that we need to give and exchange information about the results to all teachers at NJC.

I. 本研究の目的

本短期大学では英語科への正規入学者として、日本語を第一言語としない日本国籍以外の学生すなわち留学生を受け入れている。留学生たちは、入学前にある程度の日本語能力を身につけてはいるが、1年目はそのほとんどが日本人学生と同様の授業を受講できるほどの日本語力を持つには至っていない。そのため、本学ではその1年目の留学生たちに対して、2年生になって日本人と一緒に授業を受講できる程度の日本語能力を身につけるためのカリキュラムを別途立てている。

そこで本研究は、本学で日本語会話及び関連科目を担当する教員たちへのアンケートから得られた結果をもとに、1年次留学生たちに対するそれらの編成と内容を見直したうえで、日本語教育のより系統的な指導を図ることのできる資料を提示し、これからの本学の日本語教育のあり方に見合うカリキュラムを再構築する方向を示すことを目的とした。

Ⅱ. 本学1年次留学生に対するカリキュラムと学生の実態

平成16年度「外国人留学生に対して開設する科目」は以下のとおりであった。

① 日本語科目

日本語表現法Ⅰ・Ⅱ【中級】【上級】(通年各2単位)

日本語会話A・B・C・D・E・F【中級】【上級】(通年各2単位)

② 日本事情に関する科目

日本事情概論【合同】(前期2単位)

日本事情特論【中級】【上級】(通年各4単位)

日本文化論【上級】(後期2単位)

上記のように、このカリキュラムの編成にあたって、「日本事情概論」以外の科目は、中級と上級に分けたクラス編成となっている。それは、より効率的で効果的な日本語能力の習得を目指すため、入学時の日本語能力の違いを測るため入学直後に行われる日本語能力判定テスト(プレースメントテスト)に基づくものである。

また、日本語会話科目においては、A～Fまでの個々の授業における指導の重点領域を定めており、各授業でたとえ同じテキストを使用していても、授業時間内ではその重点領域の分野に力を入れて指導をするという方針をとっている。重点領域の分野とは、読解、文字・語彙、会話、作文、聴解、文法の分野で、どれに重点をおいて実施するかを定めたものである。

平成16年度1年次留学生各クラスの人数・国籍内訳は以下のとおりであった。(他に交換留学生として中国1名・韓国3名が上級クラスに在籍した。)

【中級】12名(中国11名, 韓国 0名, ミャンマー 1名)

【上級】18名(中国15名, 韓国 2名, ミャンマー 1名)※

※このうち中国1名(本学入学前に日本語能力試験1級合格)・韓国1名の計2名は、入学した時点で日本語能力が非常に優れており、1年次から日本人とほとんど同じ授業を受講していたので、上級クラスは実質16名であった。

Ⅲ. アンケート調査について

下記のような留学生科目担当教員へのアンケート調査を行った。実施時期は、平成16年12月で、第1週にアンケート用紙を配布し、2週間後の冬休み直前に回収した。

留学生の日本語教育に関するアンケート

1. ご氏名 _____
2. 担当科目名 _____ (前期 後期 通年)
3. テキストについて、次の a. b. どちらかに○をつけてください。
 - a. テキスト（購入あるいは借りたものを学生各自に持たせて）を使用した
 - (ア) 使用したテキスト名と出版社名をお書きください。

① _____	(出版社 _____)
② _____	(出版社 _____)
③ _____	(出版社 _____)
 - (イ) テキストと共に用いたもの（会話テープ・CD、ビデオなど）は何ですか。

 - b. テキストを使用しなかった
 - (ア) テキストの代わりに用いたもの（プリント、ビデオなど）は何ですか。

 - (イ) プリントの出典先あるいは使用したビデオ名は

4. 上記のテキストを使用した（または使用しなかった）理由と目的をお書きください。

5. テキストあるいはテキストの代わりに用いたものを通じて、どの分野を中心に（読解、聴解、話す、作文、文字・語彙、文法など）授業を進めましたか。

6. 授業の進め方において工夫した点や心がけたことはどのようなことですか。

7. 授業の進め方において良かったと思われる点、あるいは問題点、反省点などどのようなことでもお書きください。

8. これからの授業の改善点など、ご意見がございましたらお書きください。

Ⅲ. 結 果

本アンケートに対して、留学生科目を担当している教員8名中6名から回答を得た。最初に述べたとおり、本研究は、日本語教育のより系統的な指導を図ることのできる資料を提示し、これからの本学の日本語教育のあり方に見合うカリキュラムを再構築する方向を示すことを目的としており、回答数も6名と少ないことから、回答の統計的処理は行わず、事例報告として分析し考察することとした。

1. 教材全般について

日本語科目、特に会話の授業においては、【中級】【上級】ともに、ほとんどの教員がテキストとそれに付随するビデオや会話 CD・テープを使用している。語学教育にとって視聴覚教材利用の重要性は言うまでもないが、その利用法や効果については、各留学生の他の能力との関係も含めて、これからきちんと検証していかなければならないと考えている。この事に関しては別に稿をあらためて論ずる予定である。

会話以外の科目では自作のプリントを使用している場合が多い。

テキストを使用した理由としては、日本語の基礎が習得できる、各分野の内容が総合的に学習できる、日本語能力検定試験に対応できるなど、テキストを使用した方が系統的・総合的な学習が容易であることなどがあげられている。

プリントを使用した理由としては、留学生に興味を持たせるために、さまざまな分野からトピックを持って来ることができる、小学生や高校生対象の冊子・教科書などからそのつど抜粋してとることができる、ということなどがあげられている。

具体的なテキスト名の主なものを以下に示しておく。これらはすべて、国内の日本語教育機関（大学・専門学校等）で、数多く使用されているオーソドックスなものばかりである。

【中級クラス】

『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ本冊』（スリーエーネットワーク）

『みんなの日本語初級Ⅰ 初級で読めるトピック25』牧野昭子他（スリーエーネットワーク）

『読むトレーニング基礎編 日本留学試験対応』青木俊憲他（スリーエーネットワーク）

『項目整理 4級問題集日本語能力試験対策』日本語教育研究所編（凡人社）

『楽しく読もうⅠ・Ⅱ』文化初級日本語読解教材（凡人社）

『完全マスター漢字日本語能力試験1級レベル』かたくり日本語教師会（スリーエーネットワーク）

【上級クラス】

『日本語能力試験に出る読解1級』久保三千子他（国書刊行会）

『日本語中級読解』富岡他、『日本語上級読解』柿倉他（アルク）

『合格ドリル全400題』金子桂子他（渋谷外語学院）

『新日本語総まとめ問題集（読解編）』佐々木仁子他（アスク）

『日本語総まとめ問題集（文法編）』佐々木仁子他（アスク）

『留学生の日本語（作文編）』アカデミックジャパニーズ編（アルク）

『中級から学ぶ日本語』松田浩志他（KENKYUSYHA）

『完全マスター 1 級・2 級日本語能力試験文法問題対策』アジア学生文化協会（スリーエーネットワーク）

『日本を話そう』（ジャパントイムス）

2. 授業の進め方において工夫した点や心がけたこと

① 「日本語科目」について

【中級クラス】

日本語の能力がまだ十分でない留学生に対して、学力の向上よりも日本語学習への興味を持たせることへの配慮に重点が置かれている傾向が強い。

- ・学生の関心を保つために、文法、文字・語彙の演習とテキストと作文、読解のプリントの三つを組み合わせて行った。
- ・時折、授業の最後に小テストを行って学生の理解度を確認した。
- ・文字・語彙、文法指導においては、できるだけ場面・状況を設定してその中で使えるように配慮して進めた。
- ・教師の話は、文を短く分かりやすい言葉に留意して授業した。
- ・人間関係を深めるよう配慮、ほめ言葉を多く、身近な話題を多くした。
- ・中級・上級とも年度の終わりにかけて、会話力の確認と人間関係の確立との両方を兼ねて、個々に面接をし、留学生の希望や悩みなどを聞いた。

【上級クラス】

留学生の学習意欲を高め、その上で資格試験（日本留学試験・日本語能力試験 1 級）合格を目指した指導が配慮されている。

- ・授業の導入で学習意欲を高めるよう心がけた。
- ・できるだけ彼らの自主性を育てるために、学習意欲を強化するよう努めた。（指名読みを少なくし、誰かが読み終わったら次にだれが読むかは学生に任せた。できるだけ賞讃して自信を持たせた。）
- ・学生にあきさせないために、毎時間、語彙・文字、文法とテキストと作文等、30分単位で区切りをつける授業を心がけた。
- ・気分転換を図って学習できるように、1コマの授業の中で2教材を用意した。
- ・疑問点は遠慮なく質問させるよう心がけた。
- ・言葉を指導する場合、できるだけそれを使う場面や状況を想定して、その中で使用できるように配慮した。
- ・短作文を作らせ、新しい言葉を使えるように配慮した。授業外でも短作文できるように用紙を教室に用意し、自由に提出させ添削指導した。
- ・「留学試験」「能力試験」のための学習が後期は比重を増した。学生がそれを期待しているので。
- ・模試では問題用紙と解答用紙の両方に答を記入させ、解答用紙は提出させて教師が厳正に採点した。
- ・家族を離れた留学生生活なので、できるだけ人間関係を深めるよう努めた。

② 「日本事情に関する科目」について

【中級クラス】

- ・ ゆっくり話すこと。プリントにルビをふること。
- ・ 質問を募り，答えること。
- ・ 毎時間出席カードを作り，その日の感想や身に起こったことを書いてもらった。

【上級クラス】

- ・ 全般的に日本人の生活・考え方など他国との比較のうえで日本の状況を理解させるよう心がけた。
- ・ 最後にまとめと自分の意見を書かせて，書く力の向上も図った。

3. 授業の進め方において良かったと思われる点，あるいは問題点，反省点など

① 「日本語科目」について

【中級クラス】

- ・ 学生の意欲を持続させることができたが，進度においてやや遅れがみられた。
- ・ 漢字圏以外からの留学生，特に今年度はミャンマーからの留学生に対して，漢字の読み書きの指導が十分にできなかった。
- ・ 学習意欲の向上しない学生が1名いた。当初留学生の日本語の能力をどのように測定するか課題である。

【上級クラス】

- ・ 30分ずつ区切りをつけた授業を実践したことで，やや時間的に窮屈になった。
- ・ 能力差がかなりあり，全体説明では不十分な学生もいた。
- ・ 学習意欲が停滞のままで救えない学生が1名いたので，何か方策を考えなければと思う。
- ・ 日本語能力試験に向けて，学習意欲が高い中で授業ができた。
- ・ 日本語能力試験対策のような授業となっても，後半の20分程度は必ず別の教材を提示するようにした。

② 「日本事情に関する科目」について

【上級クラス】

- ・ なかなか満足を得るような展開ができなかった。
- ・ 日中戦争，朝鮮戦争，日韓併合等にも触れたが，彼らにとっても完全な歴史で，初めて聞くような様子もみられた。（指導者が旧満州国生まれの引き揚げ者であることも興味深かったようである。）
- ・ 日本文化を学びたいという学生の意欲が高いので，トピックについてコミュニケーションがうまく取れた。
- ・ 日本の歴史とか伝統芸術などのビデオ・スライドなど補助教材の整備が必要。

4. これからの授業の改善点などについて

① 「日本語科目」について

【中級クラス】

- ・ 中級としての指導計画を確立することが大切と考えている。
- ・ 中級は特に日本語力にばらつきがあるので，年度ごとに実態に応じた指導法を工夫する必要があると考える。
- ・ 発音やアクセントに関して，系統的な指導ができたらと思った。

【上級クラス】

- ・年間の指導計画を確立し、1級合格を多く出すような指導法の確立をする必要があると痛感している。
- ・1級対策としての授業であったが、実際の授業を考えると、レポートを書くための『作文力をどうつけるか』の課題にも取り組む必要があるだろう。
- ・「授業における重点領域」について、教師の共通理解ができていないので、次年度はその改善が必要である。

② 「日本事情に関する科目」について

【上級クラス】

- ・テキストやパンフレット程度の教科書のようなものを作って、きちんとしたい。
- ・できるだけ参加発表形式を取り入れて、学生のモチベーションを高めたい。
- ・比較文化的視点から各国の状況をお互いに勉強しながら、日本事情をカバーしていきたい。
- ・台風で2回休講となり、少々計画が狂った。

IV. 考察およびまとめ

語学教育と言うと、文型積み上げや反復練習など暗記やドリル的なものの繰り返しばかりというように、ともすれば単調なものとなってしまうがちである。けれども、今回のアンケート調査全般からは、私たち本学の教員が、【中級】【上級】クラスともに、いかにして学生たちに効果的で、なおかつ興味を失わせないような日本語の授業を進めようとしているかということに努力しているかを、読み取ることができた。

それは具体的に、例えば「日本語科目」において、1回の授業で異なる分野の教材を複数準備したり、90分という1コマの授業時間を2回あるいは3回に区切って、それぞれを異なる分野の学習に集中的に充てていること、あるいは「日本語科目」「日本事情に関する科目」の両方において、積極的にビデオ・CD・テープ教材を取り入れていること、という授業展開の方法に表れている。授業中以外でも、随時の短作文提出や、より良い人間関係構築のための声かけなどがなされており、これらも実際の授業中の学習意欲の向上につながっていると思われる。

また、留学生たちにとって日本語学習と切り離せないものとして、「日本留学試験」と「日本語能力試験」という資格試験の問題がある。本学では、前者の一定点数以上の取得者および後者の1級合格者に対しては授業料の一定割合の免除という制度がある。そのためそれぞれ11月・12月の試験に向けて、直前約1～2ヶ月間は特に、留学生たち自身からの希望もあって授業もその試験対策となることが多い。これらの試験は、マークシートの四者択一方式で「文法、文字・語彙、読解、聴解」の分野で構成されていて、全体的な日本語運用能力よりも「文型などの暗記」や「知識の量」を問う傾向が強いため、授業内容もおのずとそちらに重きが置かれることが多くなってしまうがちである。この点に関しても、本学の教員たちは、受験のスキルの面へのみの指導に走らず、場面・状況設定など実際の日本語の運用面への指導にも配慮したり、最後の15分間では試験対策とは全く別のことを行ったり、模試を行ってもきちんと教員による採点というフィードバック方式をとったりなど、留学生たちの日本語の能力全体の向上に対して手間ひまを惜しんでいない、ということも特筆されるべき事であろう。

ところがこうした私たち教員の努力をもってしても、年間を通じて日本語能力の向上および学習意

欲の向上がみられなかった学生が複数いたことも事実である。本研究の目的は、日本語教育のより良いカリキュラムを作ることであるから、このように学習意欲を向上させられなかった留学生に対する対応については、授業展開の方法に関する個別的なことでありとされて、あまり関係の無いことのように思われてしまうかも知れない。

けれども、カリキュラムは留学生全体のものであると同時に、個々の留学生たちのものでもある。カリキュラムの実践は、現実の授業における毎時間毎時間、個々の留学生たちに対して行われるものの総括である。そのことを思えば、学習意欲の向上しなかった留学生たちに対して、授業に対する学習者の個人的な資質に帰することとは別に、「教える側」からのさらなる改善策を考えるということも、より良いカリキュラムを作ることへとつながることになるだろう。この点に関しては、今後の大きな課題である。

今回のアンケートの結果から、毎年度当初の留学生に対する日本語能力判定テストによる【中級】【上級】のクラス分けが、いかに重要であるかということにあらためて気づかされる。個々の留学生たちの日本語能力の把握こそが、その年度の指導の第一歩となるからである。そこで私たちは、平成17年度の判定テストでは、従来の「文字・語彙、文法、作文、読解」の分野に加え「聴解」の力も評価の対象とすることとし、さらにそのテストは（新しく加えるその聴解を除いて）、16年度当初に用いたものと同一のものをを用いることにした。そうすることで新留学生であっても、判定テストの結果から、その日本語能力について「この学生は、昨年度のあの学生と同程度なのだ」という具体的なイメージがつかみやすくなり、得意な分野や弱点などへの指導も容易になると思われたからである。

また、16年度は人数が少なかったために大きな問題とはならなかったが、漢字圏以外の国（ミャンマー）からの留学生に対して、自力で漢字を調べることができる力をつけさせる方法も、考えておく必要があるだろう。

最後に私たち日本語関連科目教員の心構えとして、日本語会話のA～Fまでの個々の授業における指導の重点領域などを、年度当初に必要な事項記載のプリントや口頭などでしっかりと認識し、教員間の共通理解を深めたうえで、自由な意思疎通を図りながら授業を進めていくことを再確認しなければならない、ということを心に刻んでおきたい。

参考文献

石田敏子 1992『入門日本語テスト法』大修館書店

佐藤尚子 2003「今、日本語教師に求められる知識を考える」『国文学解釈と鑑賞』7月号第68巻7号、至文堂

篠崎摂子他 2004「初・中等教育日本語教師研修における教授法授業について」『日本語国際センター紀要』14号、独立行政法人国際交流基金日本語国際センター

牧野成一他 2001『ACTFL-OPI 入門 日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク

（本稿は「平成16年度『留学生の日本語教育に関するカリキュラムの研究』中間報告書」に加筆・修正を加えたものである。）